

沖縄県における高校生のヘルスリスク行動の実態  
高倉実（琉球大学医学部保健学科）

【目的】沖縄県は1995年に世界長寿地域宣言を行い内外に長寿県であることを表明したが、2000年には女性の平均寿命は全国一を維持しているものの男性は26位に転落した。その要因として青少年の交通事故や青年から壮年にかけての自殺、循環器疾患による死亡率が全国よりもかなり高いことがあげられる。生産年齢層や若年層の早世が多いことには青少年のヘルスリスク行動が大きく関与していることが考えられる。沖縄県が短命県へ推移しようとしている今、青少年のヘルスリスク行動の実態を把握しハイリスクな行動を検証することは、重点的に介入すべき要素を明確にするためにも早急に必要とされる。本研究は沖縄県の高校生を対象に多様なヘルスリスク行動の実態を記述することを目的とした。

【方法】沖縄県全域から25全日制県立高等学校（普通科17校、専門学科8校）を選出し各学年1学級に在籍する生徒2852名を対象とした。分析には欠席者189名、調査拒否者111名、性別不明者12名を除いた2540名を用いた。調査は2002年11月～12月にかけて学級において自記式無記名の質問紙法を実施した。手順は調査手引に従って学級担任が質問紙を生徒に配布し、記入させ、回収用封筒に密封させて回収した。その際、回答を拒否できることや拒否しても何ら不利益を受けないこと等を説明した。ヘルスリスク行動は米国CDCのYouth Risk Behavior Survey（YRBS）の質問項目より6領域32項目を選択し用いた。これらはバイリンガルを含む研究者によって日本語に翻訳され、いくつかは日本の実情に合うように文言が修正された。分析には傷害関連行動7項目、喫煙6項目、飲酒・薬物使用6項目、性行動5項目、食行動6項目、身体活動2項目を用いた。

【結果】YRBSと比較すると、ほとんどの行動について米国の方が悪い傾向にあったが、常習喫煙、大量喫煙、複数の性交相手、性交時のコンドーム使用の出現率には差がみられなかった。一方、シートベルト非着用、太りすぎ認識、激しい運動、筋力増強運動は沖縄県の方が悪いことが示された。生涯喫煙、現在喫煙、常習喫煙、大量喫煙、早期喫煙経験、激しい運動、筋力増強運動は男子の出現率が高かった。逆に、ヘルメット非着用、自殺念慮、性交経験、太りすぎ認識、絶食、やせ薬使用、吐く・下剤使用は女子の出現率が高かった。

【結論】沖縄県の高校生のヘルスリスク行動は、特にシートベルトを着用せず運動不足であるという特徴が示され、このようなライフスタイル傾向が沖縄県の主要死因に影響している可能性が推察された。